The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日韓における「女性」をめぐる言説 : 羅蕙錫と日本との関わりを中心に
Author(s)	金, 華榮
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45716
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【16】

氏　　名	金（キム）　華（ファ）　榮（ヨン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　１９１２８　号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**近代日韓における「女性」をめぐる言説－羅蕙錫（ナヘソク）と日本との関わりを中心に－**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　内藤　　高 （副査） 教　授　出原　隆俊　　同志社大学文学部教授　佐伯　順子

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、日本と韓国における「近代」と「女性」の問題を、羅蕙錫（以下本文中ではナヘソクと表記）という韓国近代の女性を手掛かりにして考える試みである。ナヘソク（1896－1948）は、1910 年代に日本に留学し、女性としての性の自覚と同時に、植民地としての当時の韓国の近代についても考察した、いわば韓国の〈新しい女性〉である。平塚らいてうや与謝野晶子などから大きな影響を受けたことが推察できるが、彼女について、韓国の金一葉や日本のらいてう、晶子の女性の論と比較して、性と国家の問題について論じた論文である。全体として、序章、第１章「「新しい女」をめざして－羅蕙錫と平塚らいてうとの比較を中心に－」、第２章「「恋愛」の受容－羅蕙錫と与謝野晶子との比較を中心に－」、第３章「母性をめぐる言説－羅蕙錫と平塚らいてうとの比較を中心に－」、第４章「女性が「女性」を描くこと――裸体画における「女性」」及び終章と、参考図譜、そして提出者自身の翻訳になる『羅蕙錫作品集』が付されている。序章から終章までの本文は、原稿用紙 400 字換算で約 520 枚である。

より具体的には、第１章ではナヘソクの「理想的な婦人」という近代女権論を手掛かりに、まず平塚らいてうの影響を確認するとともに、イプセンの『人形の家』のノラの両者への影響の比較を試み、男性の自我の覚醒にまで及ぶらいてうの場合ともっぱら家父長制からの女性の解放を強調したナヘソクの場合との違いを中心に論じられている。第２章では、与謝野晶子との比較を中心に、近代韓国における「恋愛」の問題が取り上げられる。留学中に晶子の恋愛論の影響を受けたナヘソクには霊肉一致の恋愛に基づいた夫婦愛の重視など晶子と共通する点は多いが、「性欲」に関しては、夫のみの肉体的関係を主張する晶子の場合と「性欲」解消のためには公娼制度を容認するナヘソクの場合との相違点なども指摘されている。また第３章では、植民地朝鮮における性の問題が「母性」という点から考察される。「良妻賢母」という教育が、植民地政策の問題と密接に結び付いていることはいうまでもないが、子供について、もっぱら母からの独立した人格であることを強調するナヘソクと、母の役割を通して次第に国家・社会へ貢献する女性というものを強調するようになるらいてうとの差違が論じられている。第４章は、画家であったナヘソクの現存する『裸婦』という作品を断髪、乳房など身体の表象、自画像としての意味などを手掛かりに分析したものである。以上のような考察を通して、男性からの自立と植民地からの独立という二重の問題意識を持たざるを得なかったこの女性の時代的意義について考察が展開されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、まだ先行研究の少ないナヘソクと日本近代女性思想家達との関係について、ナヘソクやらいてう、晶子などの資料を丁寧に読み、根本的な問題を充分に論じた研究であることがまず高く評価できる。女性、性などについてのそれぞれの思想家達の差違の指摘も説得力のあるものとなっている。またナヘソクの裸体画についての分析は、当時の統治下の韓国における美術というものの状況、とりわけ男性画家達との社会杓な意味の違いなどの一端を知ることができ、大変興味深いものとなっている。参考資料として、ナヘソクの作品の申請者自身による全訳を付するなど、全体として、丁寧に準備された充実した論文となっている。

とはいえ、問題点やさらに論じて欲しい点なども存在することは確かである。とくに第４章は、現存するナヘソクの絵画作品が少ないという制約はあるにせよ、絵画作品の読解に、最初に結論が決まっており、すべてをそれに結びつけようとする強引さが感じられる。また１～３章に関しては、用いられるテキスト、引用箇所がかなり限定されており、もう少し幅のある読みが可能だったのではないかと推察できるところがある。思想のマニフェスト的なテキストだけで論ずるのではなく、矛盾なども含めた形でナヘソクの人間というものをもっと鮮明にしてもよかったのではないかと思わせる点もある。その他、『青鞜』の様々な思想がやや単純化されていること、当時の社会における「大和魂」という言葉の使用にさらに充分な考察が必要であること、またナヘソクのフランス滞在などについてもっと言及があれば絵画の問題などにさらに別の観点が見えたかもしれないことなども指摘できよう。

こうした問題点、改良点はあるものの、それはまだ先行研究の少ないテーマに意欲的に取り組み、着実な準備によって完成された本論文の価値をそこなうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。